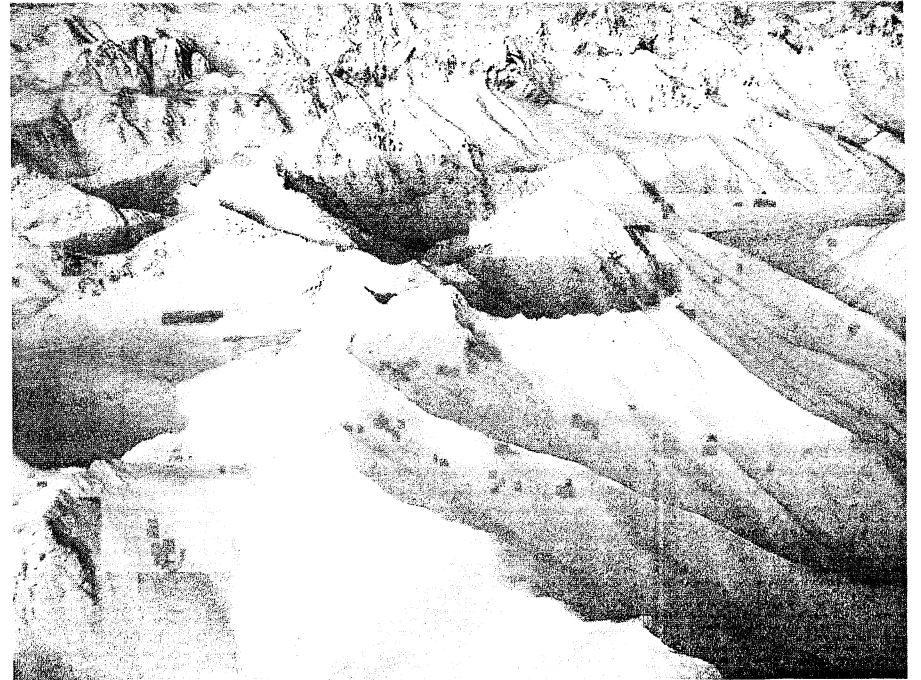


特集

死の現在



エッセイ

死の重み、生の重み

まつもと しげる

松本 滋

《軽薄短小》の時代

現代は、言うなれば、《軽薄短小》の時代である。昔風の《重厚長大》は影を潜め、何事においても軽さ、簡便性、速さ、小型化が追い求められている。パソコン、ケータイ、インターネットなどは、今や道具としての域を越えて現代社会の象徴とさえ言えよう。

この傾向は物の世界だけのことではない。人間の心、それも奥深い所にまで喰い込んでいるような気がする。例えば人間関係のあり方を見ても、特定のひととの深く長い交りは敬遠され、ごく広い範囲の、場合によっては不特定多数の人々との浅い一時的な関わりが好まれ勝ちである。親子の絆も昔ほど強くなり、師弟、先輩後輩の関係も余り濃密ではないようである。かと言って、個性的自主独立の人間が増えたかと言えさほどではない。むしろ、孤立した人間がバラバラに存在しているといった感が強い。その間のつながりは、器械を通した無機質なものに過ぎない。

そうした風潮の中で、『生と死』という、人間にとってもっとも重い意味をもつ問題までもが、以前よりずっと軽く考えられるようになってきているのではないだろうか。

その発端は、もしかすると一九八〇年代における臓器移植問題にあったと言えるかも知れない。周知のように、当時賛否両論が活発に交され、筆者もそれに加わったが、結局は、『中山案』という、世界的に見れば厳し過ぎるとも言われる法案が通った。それによって日本でも何例かは実施された。が、その後はあまり多く行われていないようである。

いずれにせよこの問題が提示したことの一つは、人間の生命の『重さ』というより『軽さ』であつたように、私には思われてならない。昔なら、この世に生きる人の生命はその人の心臓停止とともに終り、どういう人にせよ人間の一生がそれで一応完結した。その死の形はどう考えても重大な意味を持ったものであり、その故にこそ家族始め周囲の人々も納得して、故人を大切に見送つたのである。

ところが医療の発展によるとはいえ、心臓その他の臓器が未だ『生きたまま』摘出され、他人に移植されるという事態になった時、世の多くの人は戸惑った。その手術によって他の人間が『救かる』と言われても、もともとの人（ドナー）の生命の尊厳はどうなるのか。従来なら、まだ一週間、少なくとも一日二日は生きている筈の人の生命が、時間的・物理的に早く人為的に断たれ、広く（極端に言えばバラバラにして）、それも全く関係希薄の匿名の他者に分けられてしまうことになるのである。

私は前々からそうした一連の動向に疑問を抱いていた。が、その疑問の湧き出る根源的理由

が、当初は何か漠としたものであつた。しかし今でははっきりしている。すなわち、一人の人間の生命乃至は生死という掛け替えのない問題が、本来持つべき『重さ』においてでなく、むしろいわば『軽く』扱われているという一点である。

このことは、『死』が単に個人の問題でなく、社会的意味合いを深く持つ事柄だということを考え合わせれば、尚一層明らかであろう。

自殺の増加、そして『ネット自殺』

もちろん、僅かな生の可能性を求めて臓器移植を待ち望む人、待ち切れず高額な費用をかけて海外へ手術を受けに行く人が少なからずいることは確かである。しかし、その一方で、我国では折角享受している生命を自ら捨ててしまう人々も後を絶たない。その数はこの数年、年間三万人を越えるという。倒産、失業、サラ金苦、子供の非行等々、理由は様々あるだろうが、この現象も根本の所では、生命・生死の問題の重さへの感度の低下と無関係ではないと思われる。

とくに目を引くのは、若者の集団自殺である。今年（二〇〇三年）に入つてこの種の事件が連続して発生した。それも、然るべき共有の動機（例えば宗教的理由など）があつてのことではない。ある二〇代の男性がインターネット掲示板で、『一緒に死ぬ人募集』と『心中相手』を求めたのに対して、複数の応募者が現われ、死に方や段取りを相談し、実行に移している。直前に応募者の一人が気が変わって、取り止めになった例もあるというが、それにしても、何